九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

マンガ学のすゝめ

日下, みどり
九州大学比較社会文化研究院 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/16800

出版情報：西日本新聞, 2002-01-25. 西日本新聞社
バージョン：
権利関係：

2002年. 2月22日

西日本新聞
（第3種郵便物認可）

マンガ学のすすめ その5

日下みどり

『だめんず・うぉーかー』はなぜ売れる？

タフで懲りない女たちの時代

最近友人たちの間で流行っているのが倉田真由美の『だめんず・うぉーかー』。この間、第二巻が出たので買っておいたところ、友人の一人が見つけ、「わあ、二巻が出たの、借りてもいい？」と大喜びだった。書店でも平積みになっているのを見たから、ファンは他にも多いようだ。どこがそんなに良いのだろうか。

『だめんず・うぉーかー』とは、男を見る目がなくダメ男ばかりを渡り歩く女のこと。だめんずとは（駄目＋メンズ）の造語らしい。

「だめんず」の会員（特典なし）になるには、一人や二人に引っかかったぐらいでは無理。というわけで、ここに出てくる会員たちはあきれるほど次から次へとダメ男に引っかかり続ける。

作者倉田真由美は福岡出身。グラビア写真を見た限りではまがうかたなき美女で、一橋大学卒業、それがなぜか付き合うのはサイテイ男。例えばデートをすっぽかした言い訳に「中国の蛇頭にさらわれた」といい、あとでマージャンをやっていたことが判明する、という具合。

会長のヨーコさん（プロのマージャン打ち）も、絶世の美女でありながら、男を顔で選んでいるために「だめんず」になっているという変わり者。高校生のとき付き合っていた男は、彼女が自分よりマージャンが強いというだけでぶん殴る暴力男。目の周りに青あざを作って高校に行っていたという筋金入りだ。

▼▽▽

友人たちはこれを読んで、みな不思議がった。「何これ。寒気がするほどのダメ男ね」「普通こんなうそ信じる？　わからん」。悪口を言いながらもはまり込むのがミソ。一番の魅力は彼女たちがみんな明るくて、自分を笑いとばすゆとりがあること。一昔前なら愚痴になるところを、あっけらかんと「だめんず」と言ってのける視点が新鮮だ。

文学で善良な男が悪女に迷って身を滅ぼすというのはこれまでもあった。『マノン・レスコー』『人間の絆』『カルメン』などがそれで、いずれもこんなひどい女だけど別れられない、というお話。この場合、女が悪女であればあるほど、それが愛の深さのバロメーターとなっていた。同様に何の取り柄もない男に惚れるのが「見返りを求めぬ無償の愛」の強さをもの語る（これぞ「だめんず」の発想）。男を顔とフェロモンで選んだあげく、愛で身を滅ぼすなんてかっこいい。純文学がそうだけれど、他人の無頼と貧乏と不幸の話ってなんて面白いんだろう（これが不幸自慢になると嫌味になるが）。女流によくあるナルシシズムが一切ないところもいい。

▽▽▼

かつて未婚の女が「身を誤る」（死語）のは取り返しのつかない悲劇だった。『テス』、『緋文字』、ゴールズワージーの『林檎の樹』など、怖い小説は山ほどあり、読んで震え上がったものだった。失恋、不倫、離婚、シングルマザー…。今ならどうって事はない。ダメ男にひっかかっても別に恥ではないのだ。第一巻の後ろで瀬戸内寂聴との対談が載っているのも象徴的だ。昔はこんな生き方は「女文士」ぐらいにしか許されなかった。今は普通の女が好きに生きて笑っていられる時代なのだ。タフで懲りない彼女たちを見ていると、こちらも元気になってくる。疲れている時にこれは効く。

そういう意味でこれは「時代が求めていた読み物」ともいえる。文章で書いたら即ブンガクじゃないか。頑張れ、くらたま先生。直木賞は近いぞ。

（くさか・みどり　九州大学大学院教授）

女性たちの本音がのぞく倉田真由美の「だめんず・うぉかー」（扶桑社）